

医学部先輩にされる陰核の精密検査が気持ちよすぎて辛い

桜餅 りんり

花芽虫、という名前が付けられたそのぱつと見美しそうな名前の虫は、その実女性の性器へと寄生してしまう目に見えないとても恐ろしい虫である。花芽、医学名称で言うところの陰核に住み着いてしまうから花芽虫。そうやってネタ晴らしされてしまうとかわいい名前でも何でもない。

急激に広まってしまったこの花芽虫、トイレやお風呂の共用によっても広まってしまうとのことで、建物にトイレが少なく、なおかつ寮生も多い医学部内ではそれはもう爆発的に広まってしまった。いくら新種の寄生虫

で命の危機がない虫とはいえ、医学部内で蔓延しているのはあってもならない事態。しかし中には寄生されても自覚症状のない女性もいるために、症状の出た女性のみ治療していくばかりではいつまで経っても花芽虫をゼロへと抑え込むことはできない。

ということ。

「本日一斉検査を行いますので、看護科の女性学生のみなさんも今から検査に向かってもらいます」

先生の言葉に、ええーっと小さなブーイングが広がった。何せ検査を受けるということは、花芽虫が住み着いていないか陰核を診られないといけないということ。かなり羞恥心が伴う検査となってしまうのだ。

「検査を担当する方は全員女性ですか」

学生から出た質問に、先生が小さくため息をついた。

「本当はそうしかったのですが、人手が足りません。医学科の五、六年生も総出で手伝ってくれています」

「嘘でしょ」

「検査中に顔が見えないように配慮は行います。また、知人とは当たらないように調節しますので、今から配る紙に記入をしてください」

そう言って配られた紙には、「五年生に知人はいますか」「六年生に知人はいますか」という質問が並べられていた。わたしは少し考えてから、両方に「いいえ」と回答した。四年生には知り合いの先輩がいるけれど、五、六年生には知り合いはいない。いくらこれが医学的な検査と言えど知り合いにされるのはとても恥ずかしいので、不幸中の幸いだった。

順番に名前が呼ばれて、一人ずつ診察実習の部屋へと連れていかれる。

小部屋の中に入ると、産婦人科で使う内診台が置かれていた。医師または

検査役の方が来るであろう先には既にカーテンが敷かれており、なるほど顔を合わせなくていい仕組みとはこういうことかと納得する。

検査なのだから仕方がないと羞恥心を飲み込んで、下着を脱いで検査台へと上がる。やがてきいっと丸椅子を引く音がして、カーテンの向こうに人の気配がした。下半身をすでに丸出しにしているわたしは、ぐっと足指を丸めた。

「準備はできましたか？」

「はい」

「分かりました。少し、足を固定しますね」

——あれ。

ふと、違和感が脳裏をかすめた。若い男の人の声。それも何だか、訊いたことがある。マジックテープでべりべりと脚を固定されたのち、ゆっく

りと台が上がっていき、脚が押し広げられる。またぐらがあけっぴろげになつていく羞恥心に耐えながら、芽生えた違和感を探つてゆく。でもわたし、五年生と六年生には知り合いいはないはずで。

がしゃん、と脚が大きくM字開脚に開かれた瞬間、ばちん、とひとつのことを思い出した。

——飛び級することになったんだよね。だから来年から、あなたの二つ上の先輩だね。

サークルの憧れの先輩が、そう言つて笑つていたことを——。

「……っ、！」

慌てて声を出そうとして、しかし寸で飲み込んだ。喋ったら、わたしだつて先輩にばれてしまう。

「大丈夫ですよ」

先輩は落ち着いた声でそう言って、わたしを宥めてきた。

「すぐに終わりますからね」

優しい優しい、先輩の声。わたしは声を出さずにこくこくと頷いて、あ
あどうか最後までばれませんかのようにと祈るしかない。何せわたしはすで
に、先輩の前で性器をあけっぴろげにした状態なのだから。

先輩は落ち着いた優しい声で、「寄生虫の遺伝子が出ないか検査をしま
すから」と言って、ゴム手袋でわたしの性器を開いてきた。適格に陰核の
あたりを露出されて空気にさらされて、思わずびくりと震える。いま、そ
れが先輩の目の前にさらけ出されていると思うと、恥ずかしくて仕方がな
い。

「綿棒で、一分ほど表面を擦りますね」

「……っ、……」

「少し刺激が強いですから、声が出しなくなったら遠慮せずに」

そう言ってくれる先輩は、暗に感じてしまっても仕方がないと言ってくれているのだろうけれど——声なんて、出せるはずがない。先輩の前で。

「では、力を抜いて。いきますね」

ぎゅ、と手を握りしめて、極力力を抜く。ただの検査、ただの検査、それを何度も何度も言い聞かせたのに——。

「……あ、っ」

乾いたそれが、弱い力ですりすり、と陰核を擦った瞬間、腰がびくりと跳ねそうになった。しかし先ほどマジックテープでされた固定が思いのほかしっかりとしていたらしく、身体が大きく動くことはなかった。その分先

輩の手は、滑らかに動き続ける。

「すぐ終わりますからね」

すりすり、すりすり。裏側から表面まで、先っぽから根本まで。すりすりと細かく擦られるたびに、あまりの快楽に身体がびくびくと跳ねてしまう。声を出したいけど、出したらばれてしまうので、奥歯で噛み締める。苦しい。気持ちがいいのに声を出せないことが、こんなにも苦しいだなんて。

「あと三十秒」

先輩が言う。三十秒、まだ折り返しという事実には頭の中が真っ白になった。早く終わって、気持ちよくなりたくない。そう祈れば祈るほどジンと陰核は熱くなって、すりすり擦られるそれを気持ちがいいそれと感じてしまふ。丁寧に裏側を擦られれば、頭の中が真っ白になるほど気持ちがい

い。

「二十……十五……十、九、八、七」

あつ、いくかもしれないと思つたけれど、こんなことで達する訳にはいなくて、奥歯を食いしばる。

「六、五、四、三、二、一……。はい、おしまいですよ」

ぎりぎり耐えきつたわたしは、大きく息を吸い込んだ。ひじ掛けをぎゅうつと握つて肩で大きく呼吸をして、じんじんと腫れたその場所から意識を逸らす。達しかけたそこは正直ちよつとむずむずしているけれど、どうしようもない。検査が終わつたら、なんとか一人で発散するしかない。

それにしても。

——先輩に、こんなことされるなんて。

不埒でいかがわしいとは自分でも思うのだけれど、ただの検査だとは分

かっているのだけれど、やっぱり気持ちがいいことはどうしても気持ちがいいし、何よりそれをほのかに恋心を抱いていた先輩にされてしまうと胸がぎゅうっと苦しくなる。もちろんとてつもなく恥ずかしくはあるのだけれど、その恥ずかしさだって妙に身体が落ち着かないような気持ちよさせてくる。

でもこれでおしまいと、どこかほっとしたようなどこか残念なような気持ちになったのに、

「あ、」

と、先輩はカーテンの向こうで声を出した。

「花芽虫の反応、出てるね」

「えっ」

思わず声を出してしまい、慌てて口を手のひらで塞いだ。先輩はその一

言では気が付かなかったのか、うん、とあっさりとした声を出す。

「感染してるかもね。ちよつと詳しく検査しようか」

「え……う……」

「ちよーつと辛いかもしれないけど、詳しく調べさせてね」

やだ、と口にしようとして、でも声を出すことはできなくて、ぎゅうつと足指を丸めることくらいしかできない。先輩は「大丈夫だからね」と言ったあと、さらりと残酷なことを口にした。

「今の綿棒の検査、今度は場所ごとに一回ずつさせてね。四回だけ」

ひ、と身体が強張ったことが伝わったのか、先輩は、大丈夫、大丈夫と子どもをあやすような声を出す。

「声が出ちゃってもいいからね。俺のことは気にしないで」

気にしないのは無理です、という言葉を飲み込んで。わたしは唇を食い

しばった。微かに何かの器具と器具が擦れる音がして、ゴム手袋をつけた先輩の手が陰核に触れてくる。

「一本目いくね。力抜いて、」

「うっ……！」

すりすり、と陰核の表側が擦られる。きゅっと根本から先端までを往復されるとその場所が一気に熱くなって、わたしは漏れ出そうになる声を押し殺した。同じ場所を何度も何度も擦られると、そこがどんどんとびりびり気持ちよくなってしまう。

「あっ……う、う……っ」

二本目、右側。もうすっかり濡れたそれを陰核で擦られると、ぐちゅぐちゅと音がする。けれど検査に支障がないからか、先輩は気にしない。びくびく震えるわたしの脚に構わずに、淡々と検査を続けてゆく。

三本目、左側。最初はそんなに気持ちがいい場所じゃないと思っていたのに、丁寧に擦られることを繰り返されると、頭の中がぼんやりとしてきってしまう。気持ちがいい。気持ちがいい気持ちがいい気持ちがいい。いきそうになるのを堪えて唇を噛み締めて、それがひどくもどかしくて辛くて、わたしは不意に悟る、ああわたし、いきたいんだって。

「最後の一本ね」

「……っ！ あっ、……ふ、あっ……！」

最後は、陰核の裏側だった。一般に裏筋と呼ばれる部分をすりすり綿棒の頭で擦られて、お腹がびくびくと震えた。でも縛られたままのわたしはただそのまま擦られ続けるしかなくて、頭の中がふわふわとおかしくなっていく。

「あ……あっあ、」